

聾学校の児童・生徒数の推移について
聾学校の建築計画に関する基礎的研究 3

正会員 ○ 平根 孝光*1

吉田 あこ*2

桜庭 晶子*3

□はじめに

聾児（学校教育法「特殊教育」で規定されている聾者をさす）の教育は、聾学校を中心に一般の小・中学校難聴学級等で行われていることから、聾学校在籍児が小・中学校へ、また小・中学校在籍児が聾学校へとといった聾児の移動がみられる。

本報告は、最近5年間の聾学校の児童・生徒数の推移から、その概況を把握し、聾学校の建築計画に資することを目的としたものである。

なお、聾学校の学部・学年別の児童・生徒数を把握するための資料として、全国聾学校校長会編集の全国聾学校教職員名簿（昭和63年度、平成1・2・3・4年度版）を使用した。

□児童・生徒数の義務制施行以降の推移

聾学校は、明治11年、京都の盲啞院が始まりとされ、大正12年の「盲学校及び聾啞学校令」により、盲学校と聾啞学校が制度上分離されるとともに、学校の設置義務が道府県に課せられ、さらに昭和23年に

は小・中学部の就学義務制が始まり今日に至っている。

表-1は、小・中学部義務制施行以降の児童・生徒数の推移を示したものである。その推移をみると、昭和23年の義務制の施行に伴い増加傾向にあったが、昭和35年あたりからは、小・中学校難聴学級の整備等ともあいまって減少傾向がみられ、現在はピーク時の半数を下回っている状況にある。

□最近5ケ年の児童・生徒数の推移

昭和63から平成4年までの聾学校の学年別児童・生徒数の合計は表-2に、また昭和63年から平成3年までの小・中学校難聴学級の学校別児童・生徒数の合計は表-3に示すとおりである。最近5年間の聾学校在籍者数は、引き続き減少傾向にある。しかし、学部別でみると、小学部で全体と同様の減少傾向がみられるものの、他の学部では一様の減少とはなっていない。これは、小学部以外は3学年構成であり、各年代で異なる児童・生徒数が、より大きく影響しやすくなるものとなっていることも一つの要因と思われる。

表-1 小・中学部義務制施行以降の聾学校児童・生徒数の推移

(人)

	昭和23	25	30	35	40	45	50	55	60	平成2
幼児・児童・生徒数	7,930	11,600	18,694	20,723	19,684	16,586	13,897	11,577	9,404	8,161

*昭和23～60年は文部省統計より、平成2年は今回調査資料より作成した。

表-2 最近5ケ年の聾学校児童・生徒数の推移

(人)

	教育相談 0才12	幼稚園				小学部							中学部				高等部本科				専攻科			計
		3才	4	5	重聴	1年	2	3	4	5	6	重聴	1年	2	3	重聴	1年	2	3	重聴	1年	2	3	
昭和63	(313)	478	558	628	0	391	325	339	340	491	519	331	488	437	490	177	648	672	670	109	256	253	24	8,897
		(1,664)				(2,736)							(1,552)				(2,099)				(533)			
平成1	(358)	534	509	537	7	432	383	317	333	327	511	281	564	463	460	222	622	628	645	83	231	227	53	8,727
		(1,587)				(2,584)							(1,709)				(1,978)				(511)			
平成2	(466)	466	546	504	2	307	424	383	317	337	333	295	541	560	459	182	586	614	628	112	254	221	21	8,627
		(1,518)				(2,459)							(1,748)				(1,940)				(496)			
平成3	(404)	653	469	573	3	345	346	396	376	307	337	316	365	530	571	208	584	577	607	131	241	214	42	8,569
		(1,672)				(2,423)							(1,674)				(1,899)				(497)			
平成4	(338)	479	692	470	28	345	330	347	397	375	321	306	362	374	509	170	730	577	573	138	221	208	25	8,315
		(1,669)				(2,421)							(1,415)				(2,018)				(454)			

* () は学部合計人数

A study on transition of the number of deaf school children

5209

A basic study on architectural planning for the Deaf School 3

HIRANE Takamitsu et al.

表-3 小・中学校難聴学級の児童・生徒数の推移
(人)

	昭和63	平成1	2	3
小学校	1,221	1,136	1,038	1,011
中学校	430	432	450	410

* 文部省統計より

また、この減少傾向は、小・中学校難聴学級においても同様の傾向がみられることから、聾学校から小・中学校難聴学級への転校による減少といったものではないことがわかる。

□同一年代における児童・生徒数の最近5年間の推移
つぎの図-1は、最近5年間の同一年代における児童・生徒数の推移を示したものである。

まず幼稚部の推移をみると、昭和63年時4オクラス等に多少の減少がみられるものの、全体としては、若干の増加または横ばいとなっている。

つぎに、幼稚部から小学部へ進む時であるが、ここでは、どの年代も大きな減少がみられる。その人数は、昭和63年時5才で31.2% (196人)、平成1年42.8% (230人)、同2年31.5% (159人)、同3年39.8% (228人) となっている。小学部内では、平成2年時1年での増加、同2年での減少など年代によって若干の増減はあるものの、全体

としてほぼ横ばいとなっている。

小学部から中学部へ進む時点では、昭和63年時6年で8.7% (45人)、平成1年時5.9% (30人)、同2年時9.6% (32人)、同3年時7.4% (25人) と多少の増加がみられる。中学部内では、増加している年代および減少している年代のどちらもみられ、他の学部と比べ年代毎の増減の揺れは若干大きいものとなっている。

そして、つぎの中学部から高等部へ進む時点では、幼稚部から小学部へ進む時とは逆に、どの年代でも大きな増加がみられる。その人数は、昭和63年時6年で26.9% (132人)、平成1年時27.4% (126人)、同2年時27.2% (125人)、同3年時27.8% (159人) となっている。高等部本科内では、1～3年までどの年代も若干の減少となっているものの目立ったものではない。

これらのことから聾学校の児童・生徒の就学パターンを概括すると、幼稚部から小学部に進む時点でおおよそ3～4割の児童・生徒が聾学校から小学校へ転校し、そして中学部入部段階でおおよそ1割弱が聾学校へ戻り、さらに高等部入部段階でおおよそ3割弱が聾学校へ戻るといふ、Uターン型の就学パターンを伺うことができよう。

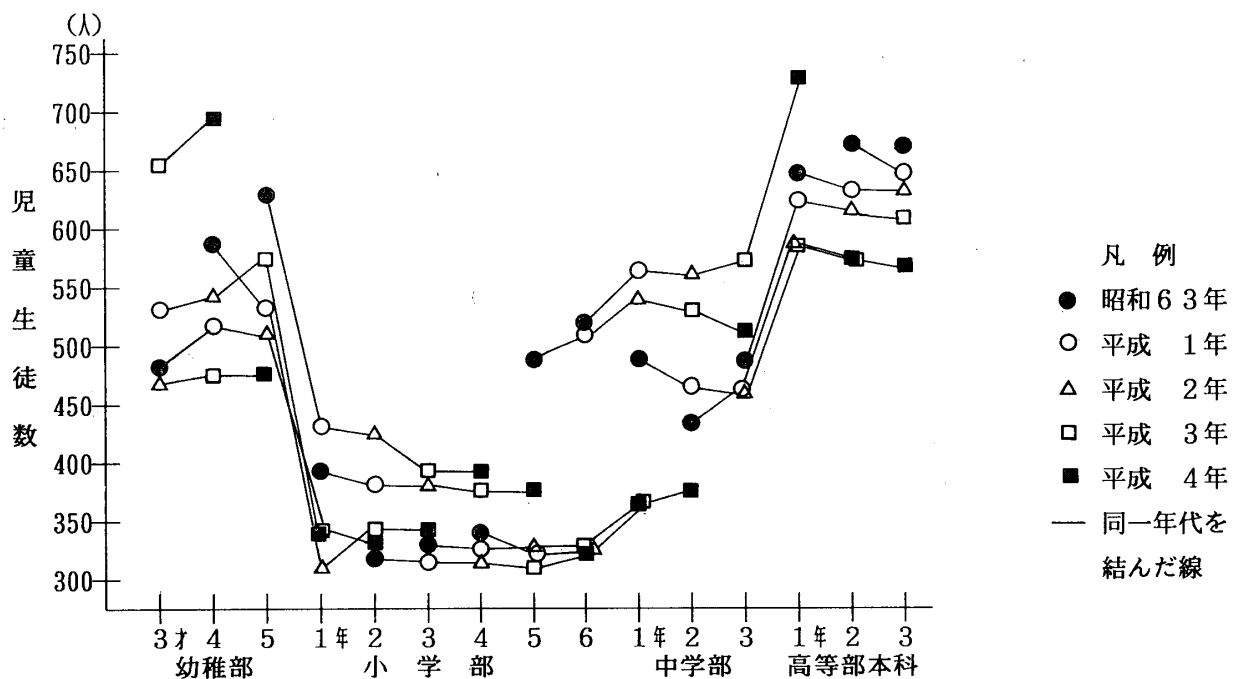


図-1 最近5ケ年の同一年代別にみた児童・生徒数の推移

* 1 筑波技術短大助教
* 2 同教授 * 3 同助手